

# 1 寒村生まれの社会学者

## 誕生から高等師範学校まで

ピエール・ブルデューは一九三〇年八月一日、スペインとの国境に近い南フランスのペアルン地方（現在のピレネー＝ザトランティック県、ダンガンで生まれた。

ダンガンは当時の人口がわずか四〇〇人程度の小さな村で、文字通りの寒村である。ブルデューの父親は小作農の息子。母親も農家の出だが、こちらはかなりの大家<sup>たいけ</sup>だったようで、ピエールが生まれたのは母親の実家だったという。

彼の誕生後まもなく、父親が近隣のラスーブ村の郵便配達夫（のちに配達夫兼郵便局長）となったため、一家はそちらに移住した。ピエール少年は小学校時代をこの村で過ごすことになるが、ここも

当時の人口は一六〇〇人程度で、片田舎の僻村であることに変わりはない。したがって、将来の大知識人およびそ都会のエリートとは程遠い農村育ちであったことになる。

こうした環境に生まれ育った子どもが中等教育を受けるためには、村を離れて都市部のリセ（高等学校）の寄宿舎に入るしかなかった。優秀な小学生であったブルデューは、十一歳の年に故郷から十数キロ離れた地方都市、ポールのリセの寄宿生となる。そして市内のブルジョワ家庭の通学生たちと机を並べて学ぶうちに、世のなかに歴然と存在する社会的格差をまのあたりにし、自らの出身階層を意識することを余儀なくされた。彼は晩年になって、劣悪な環境での生活を強いられた六年間の苦しい寄宿舎生活が自分の人間形成に決定的な役割を果たしたと回想しているが、のちの研究生活を方向づける原点がこのリセ時代の経験にあったことはまちがいない。

持ち前の反骨精神ゆえに数えきれないほどの「教室留置」や「外出禁止」処分を受けながらも、ほとんど学業面で頭角を現したブルデューは、校長の推薦を受けて、一九四八年にはパリ屈指の名門リセであるルイ＝ル＝グラン校の高等師範学校受験準備学級に入学した。ここでも服装や立居振舞いの点で、地方出身の寄宿生である自分とパリの通学生たちのあいだに明確な境界線があることを痛感させられたというが、それでも学校自体はポールの寄宿舎に比べればだいぶベラルでましな環境だったらしい。

そして三年後の一九五一年、ブルデューはフランスでも最高のエリート養成機関であるパリの高等師範学校（エコール・ノルマル・シュペリウール）の哲学科に入学した。この学校の卒業生は「ノルマリアン」と呼ばれ、官界や学界で活躍することが約束された超エリートとして遇される。卒業生に

は哲学者のアンリ・ベルクソンやジャン・ポール・サルトル、作家のロマン・ロランやシャルル・ペギー、社会学者のエミール・デュルケムやレイモン・アロンなど、錚々たる著名人が名を連ねており、ブルデューの世代に近いところではミシェル・フーコーが五年先輩、テクスト理論で有名なジェラルド・ジュネットや映画評論で知られるクリスチャン・メッツが同期生で、哲学者のミシェル・セーラーやジャック・デリダは一年下級である。

### アルジェリア経験と学者としての出発

高等師範学校の二年目にライブニッツの翻訳・注釈で修士号を取得した後、ブルデューは一九五四年に哲学の教授資格試験（アグレガシオン）に合格した。この試験に合格すると「アグレジェ」と呼ばれ、リセやコレージュなどの中等教育機関で教える資格が得られるとともに、「ブラグ（アグレジェの教授）」という資格で大学でも教壇に立つことができるようになる。サルトルやボーヴォワール、メルロ・ポンティやレヴィ・ストロースなどもみなアグレジェであるから、いわば一流知識人の身分証明書のようなものである。

ブルデューは資格取得後、高等師範学校にあと一年在籍することができたにもかかわらず、同校の先輩にあたる科学哲学者、ジョルジュ・カンギレムの指導の下で博士論文を準備しながら、中部フランスのムーランにあるリセ、テオドール・ド・バンヴィル校の哲学教師として教員生活を始めた。エリートの特権に胡坐（あぐら）をかいてはいけけない、少しでも早く社会に貢献しなければならないという義

務感からの選択であつたと、のちに本人は語っている。

しかしまもなくアルジェリアで独立戦争が始まると、翌一九五五年には陸軍に徴兵されて北アフリカに渡ることになる。結果的には、この滞在経験が彼の学問上の方向性を決定する契機となった。

フランスの大学生は、在学中に予備士官学校に通って将校の資格を得ておけば一般の兵士として扱われずに済むという制度があるが、ブルデューはあえてそうせず、ただの一兵卒として従軍する道を選んだ。それでもノルマリアンへの配慮からか、最初は空軍のヴェルサイユ師団心理局に配属されたが、アルジェリアの独立を認めない立場をとる上官と激しく対立し、上官侮辱のかどで現地派遣組に入れられたのだという。

二年間（正規には一年半）の兵役が終わるころ、アルジェリア社会への関心にめざめたブルデューは、兵役終了後も現地にとどまってアルジェ総督府で事務仕事に携わり、当地に暫定政権が成立した一九五八年にはアルジェ大学文学部助手の職を得た。民族学的・社会学的フィールドワークに基づく最初の著作、『アルジェリアの社会学』がクセジュ文庫の一冊として刊行されたのも、同じ年のことである。その意味では、ブルデューが二十八歳を迎えたこの年が彼の学者としての出発点であつたということになる。

一九六〇年には、レイモン・アロンが教授を務めていたパリ大学社会学講座の文学部助手に採用されてフランスに帰国し、翌六一年にはアロンが創設したヨーロッパ歴史社会学センターの事務局長（実質的には所長）に就任。また、同じ一九六一年からは三年間、リール大学助教授として教鞭を執っている。

そして一九六四年にはまだ三十代前半の若さで社会科学高等研究院教授・研究主任となり、並行して母校の高等師範学校で講師も務めた。この間、一九六三年には『アルジェリアにおける労働と労働者たち』（A・ダルベル、J・P・リヴェ、C・セベルとの共著）、一九六四年には『根こそぎ——アルジェリアの伝統的農業の危機』（A・サヤドとの共著）など、アルジェリアをフィールドとした共同研究の成果を相次いで書籍化している。ブルデューはのちに一九八五年におこなわれたインタヴューのなかで、自分が主導してきた教育社会学および文化社会学の基礎となった概念の大半は、アルジェリアで実施した民族学的・社会学的研究の成果を普遍化するところから生まれたと語っているが（『哲学のフィールドワーク』、『構造と実践』所収）、この言葉の通り、初期のアルジェリア研究のうちにその後の仕事を支える理論装置の原型はすでに宿っていたと言えるだろう。

## 教育社会学の原点

その後、ブルデューは高等師範学校の一年上級であったジャン・クロード・パスロンらと共同でフランスの教育機関における不平等の生産メカニズムを調査し、一九六四年にまず『学生とその学業』を、次いでその成果を踏まえて同じ年に『遺産相続者たち——学生と文化』（いずれも共著）を刊行した。これが彼の研究の大きな柱となる教育社会学分野での最初のもっとも著作である。その概要は以下の通り。

従来、学生間の文化的不平等は、親の収入に起因する経済的不平等に還元されるか、さもなくば

生まれつきの才能の差という運命論的理由に回収されるかのいずれかであった。しかしブルデューらはそこに別の要因が作用している可能性を想定し、学生の出身階層と、学業成績、教養知識、言語能力、進路選択等との相関関係を実証的に分析した。

その結果、学生たちのなかには、家庭においてさまざまな形で文化的蓄積を継承する機会に恵まれた者と、そうでない者が存在することが明らかになる。これを踏まえて著者たちは、両者を隔てる社会構造的な差異にこそ教育機会の不平等の主因があること、そして学校という制度はこの格差を縮小するどころか、むしろ選別と排除の機制によって拡大する傾向があることを論証してみせた。出身階層による高等教育レベルでの不平等の要因を、家庭における文化的遺産の目に見えない相続という事象から説明しようとする問題意識と方法論は、まさに『遺産相続者たち』というタイトルそのものに凝縮されている。

さほど分厚くないこの書物には、のちにブルデューの著作をいろどることになる難解な概念の大半はまだ登場していない。たとえば本文中には「学生界」という用語が頻出するが、ここで「界」に相当するのは *milieu* というごくありふれた単語であり、のちに特殊なニュアンスを担って駆使される *clanp* (場、界) ではない。また、ブルデュー社会学のキーワードとして人口に膾炙している「文化資本」というコンセプトはいつさい現れず、「情報資本」というタームが一カ所用いられているだけであるし、今では普通に使われるようになった「ハビトゥス」(知覚・思考・行動の無意識的な性向の集合体) という用語も、この時点ではまったく使われていない。辛うじて「慣習行動」<sup>プラティイック</sup> や「正統性」<sup>レジティミティ</sup> といった言葉は散見されるが、あくまで断片的な使用にとどまり、それらを社会分析の道

具として位置づけるだけの明確な理論的枠組みはまだ確立されていないように見受けられる。したがって、これは本格的な体系的・理論的著作というよりも、当時の学生実態調査に基づく具体的分析の試みと言ったほうが適切だろう。

とはいえ、のちのブルデュー社会学を予感させる萌芽は随所にうかがうことができる。小著ながら、この本は家庭や大学で作動している文化資本の伝達と階級的ハビトゥスの継承・再生産のメカニズムを剔出したという意味で、のちの『再生産』から『ディスタンクシオン』に至る仕事の原点に位置づけられる一冊と言っていい。

なお、この時期に形になった教育社会学分野の仕事としては、他に一九六五年の『教育関係とコミユニケーション』（J・C・パスロン、M・ド・サンマルタンとの共著、邦題は『教師と学生のコミユニケーション』）がある。

## 文化社会学への拡張

いっぽう、この頃からブルデューは芸術を対象とした文化社会学の分野にも関心を広げ、チームによる共同研究の成果を相次いで書籍化していく。写真を扱った一九六五年の『中間芸術——写真の社会的用途に関する試論』（L・ボルトンスキー、R・カステル、J・C・シャンボルドンとの共著、邦題は『写真論——その社会的効用』）、および美術館を訪れる観衆の実態を社会学的に分析した一九六六年の『美術愛好——美術館と観衆』（A・ダルベルとの共著、邦題は『美術愛好——ヨーロッパ

の美術館と観衆」がそれである。

前者(『写真論』)の「序論」で、ブルデューは「絵画や音楽のような、全面的に聖なるものとされている芸術活動とは異なり、写真の実践は技術的観点からもまた経済的観点からも、あらゆる人の近づきうるものとみなされて」いると述べているが、じつさい、写真は絵を描いたり音楽を演奏したりするのと違って特殊なテクニックや訓練を必要とするわけではないし、キャンヴァスやピアノがなくとも簡単に実践できるので、その意味では明らかに万人向けの趣味である。

だが、このありふれた慣習行動のなかにも、じつは階級性が濃厚に反映していることを著者たちは明らかにした。誰もがスマートフォンで気軽に写真が撮れる現代と違って、この本が刊行された一九六〇年代半ばのフランスではまだカメラが比較的高価な商品であったから、家庭の経済状況は否応なく関係していたはずだし、現代においても、職業は何か、子どもがいるか、居住地域はどこか、旅行にどれくらい出かけるか、といった種々の生活条件は、何を撮るかという被写体の選択を始めとして、いつ撮るか、どこで撮るか、どのように撮るかといった具体的な実践形態に少なからず影響を与えずにはいないだろう。写真を撮る者の判断や行動は、常にそうした社会的要因によって規定されているつまりここで問題とされているのは「撮影された写真」それ自体の芸術的価値ではなく、あくまでも「写真を撮影するという行為」のもつ社会的な意味なのである。

もう一冊の『美術愛好』においても、事情は同様である。ここで分析対象とされているのは「美術館を訪れる」、あるいは「美術作品を鑑賞する」という文化的行動であって、絵画や彫刻そのものの芸術的価値ではない。したがってこの本で明らかにされるのは、美術作品を享受する機会それ自体が



階級によって平等ではないという現実であり、家庭環境がもたらす文化的不平等を学校教育がさらに助長しているという厳然たる事実である。美術愛好という、一見したところ自由意志に委ねられているかに見える志向にも社会的要因が深く関与していることを論証したその内容は、やがて『デイスタクシオン』へと受け継がれ、十全な展開を見ることになるだろう。

これらの二冊は、資料として利用された大量の統計資料やアンケート結果が巻末に収録されていることからわかる通り、アプローチの仕方それ自体は基本的に教育社会学的研究の延長線上にある。つまりこの時期のブルデュー（および共同研究者たち）は、社会学的方法論をそのまま保持しながら、扱う対象を文化全般に拡大していったのである。

## 五月危機と「再生産」の理論

こうして教育と文化という二つの大きなテーマを軸として研究を進めてきたブルデューは、一九六八年に「教育文化社会学センター」を設立し、その後長年にわたって所長として数々の共同研究を牽引することになる（このセンターは一九八四年に「ヨーロッパ社会学センター」と改称された）。そのかたわら、同じ六八年には『社会学者のメチエ』（J・C・パスロン、J・C・シャンボルドンとの共著、改訂版は一九七三年）を刊行している。これは社会科学高等研究院で学ぶ学生たちの教科書として書かれたもので、まだ認知度が高かったとは言えない社会学の方法論を三名の著者たちが分担して執筆した解説書であるが、実質的な本文は最初の三分の一弱で、残りの三分の二以上は関連する

著者（カンギレム、バシユラル、ワイトゲンシュタイン、デュルケーム、モース、ウェーバー、マルクス等々）のテクストの引用集になっている。

ところで一九六八年といえれば俗に言う「五月危機」の年であり、その影響はブルデューにも波及せずにはいなかった。本人の意図するところとは別に、四年前に刊行された『遺産相続者たち』が大学や社会の現状に異議を申し立てる学生たちの理論的根拠として利用されたため、彼らの反抗運動に否定的であったアロンとのあいだに亀裂が生じる結果となったのである。実際は単なる誤解、あるいはちょっとした行き違いにすぎなかったようにも思われるが、実情はともあれ、かつては教授と助手という立場であった二人はこれを機に絶縁状態となってしまった。

心ならずもその原因となった教育社会学的研究は、一九七〇年の『再生産——教育システムの理論のための諸要素』（J・C・パスロンとの共著、邦題は『再生産——教育・社会・文化』）において理論的な総合化を見る。ここでは『遺産相続者たち』には見られなかった「文化資本」というタームが本格的に導入されているほか、「文化的恣意」や「象徴的暴力」といった重要な概念が駆使されている。

「文化的恣意」とは、それ自体が真理であるという客観的根拠は存在しないのに、あたかも絶対的・普遍的な真理であるかのごとく意味づけられ価値づけられた知識や教養のありようを指す。また「象徴的暴力」とは、著者自身の言葉を借りれば「さまざまな意味を押しつけ、しかも自らの力の根底にある力関係をおおい隠すことで、それらの意味を正統であるとして押しつけるにいたる力」のことである。「暴力」というタームはいささか刺激的であるが、これは要するに、可視的な物理的暴力と違

って、人々の思考や感性を無意識のうちに方向づけてゆく不可視の強制力と理解しておけばよい。

以上二つの概念を踏まえていえば、『再生産』で問題化されているのは、無根拠な「文化的恣意」の押しつけによって教育行為の「象徴的暴力」が及ぼす支配的価値観の刷りこみ効果であり、その結果として反復・継続されてゆく既成の階級構造の再生産過程である。しかもさまざまな選別システムは、文化資本に恵まれない家庭環境に育った人々をはじめから競争への参加をあきらめてしまう方向に誘導する効果もある。こうした暗黙の「自己排除」という現象もまた、階級再生産の要因として無視することはできない。

### 『ディスタンクション』の射程

ところで社会学という学問領域の特性からすれば当然のことではあるが、ここまでの著作はほとんどすべてが他の研究者との共著という形で刊行されてきた。しかし一九七〇年代以降の著作は、多くがブルデューの単著として発表されている。

まず一九七二年にはアルジェリアのカビリア族を扱った『実践研究の素描——カビリア民俗学研究論文三編所収』、一九七七年には『アルジェリア 60——経済構造と時間構造』（邦題は『資本主義のハビトゥス——アルジェリアの矛盾』）というように、ふたたびアルジェリア関連の著作が二冊刊行されている。この間、ブルデューは一九七五年に研究誌『社会科学研究学報』を創刊し、自ら数々の論文を掲載するとともに、若い研究者たちに成果発表の場を提供した（この雑誌は半世紀たった二〇二